

図書報だより

題 字 島根県教育委員会教育長

号 数 第 21 号

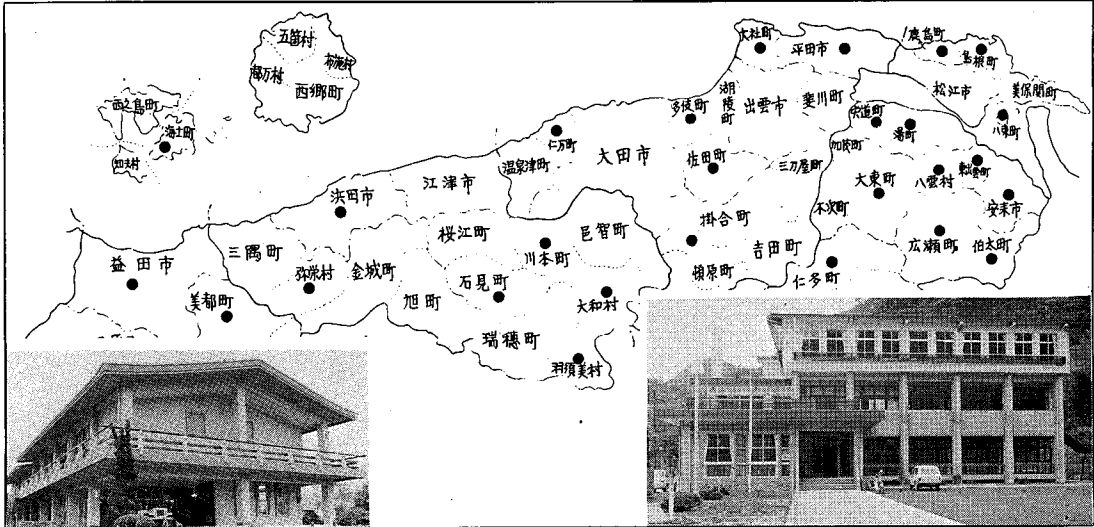
発行日 昭和 48 年 2 月 1 日

編 集 行 島 根 県 立 図 書 館

松 江 市 内 中 原 町 52

TEL (0852) 22-5725

印 刷 (有) 高 浜 印 刷 所



公 民 館

— 公 民 館 図 書 室 —

人類は言葉を持ち、文字を発明した。そして書物が文化の継承・交流・発展の基本手段として役立ち、今日の文明社会を招来したといっても過言ではあるまい。今日ではテレビやラジオなどの電波媒体が著しく発達して、われわれの生活に大きな影響を与えている。文字をとおしてじっくり考えるような機会は次第に少なくなって、ややもすれば氾濫する情報の洪水や流行の支配に圧倒されて個性や主体性を失い、また、価値観の混乱や対立が個人にも社会にも現れている。

このような情報化社会においてこそ読書はわれわれの日常生活の中に大きな影響力をもつものであり、図書の選択とともにその重要性が改めて認識されなければならないと思う。

最近、日常生活圏内の住民のための社会教育施設として公民館の重要性が再認識され、各市町村で施設の整備強化が進められている。この公民館に「図書や各種の資料」をととのえて、住民の利用に供することは公民館の基本的事業の一つである。図書館のない地域の住民にとって、公民館図書室は重要な読書施設だからである。しかし図書室の運営で最も問題となるのは図書の確保である。公民館は専門施設でないかぎり当然限界があり、独自の力で住民の読書需要を満たすことは不可能である。そこで、図書館へ働きかけてモデル文庫や自動車文庫の協力を求め、図書館のサービス網を活用することによって効率的な運営を図ることができる。もちろん図書や資料の相談に応じたり、読書グループの育成などに公民館が努力せねばならないことは当然である。近い所で、いつでも必要な情報が得られ、誰れでも気軽に借りて読むことができれば読書人口はうんと増加すると思う。

このようにして、公民館図書室の充実強化こそはやがて市町村立図書館の設置へと発展していくであろう。

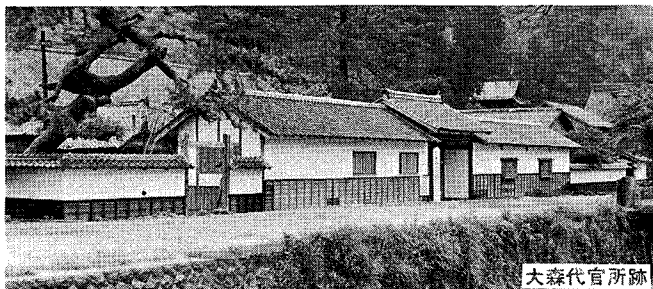
島根県公民館連絡協議会長 松 尾 巖

石見銀山のよさ

山根 俊久

近ごろ石見銀山がしきりに話題になるのは、おたがい、うれしいことである。

近古期以来引続いている指折りな鉱山と言えば石見銀山、佐渡金山、生野銀山で、三山として誇りをもちながら明治に入った。この外にも全国では随分沢山な古くからの鉱山があるのだが、何故石見銀山が国の史跡としての鉱山の第1号として指定せられたのであろう。佐渡をおき、生野をおいて取りあげられたところには相当な理由がなければならぬ。佐渡がまだに採択



大森代官所跡

にならぬのに、石見はいち早く国指定となって、県も国も積極的にその顕揚につとめているというのはい体何故であろう。それは、産銀が豊かであったために、歴史的にいろいろ貢献しているということ以外に、もっと秀れたことがあるからである。

○

それでは、その「他に秀れたところ」というのは何か。それをひと口にいうと、銀山が一国をなしていたからである、といたい。銀山町の表入口の蔵泉寺口を入ると、もう謂はば「銀山国」なのである。地域は狭くとも整然として乱れぬ組織の下に一体化している鉱山区の姿は、どこよりも美事であった。銀山役人も銀山経営者も坑夫たちも精練にあたる人たちも悉くこれ銀山人である、という誇りをもっており、もたせていた。これは何としても初代奉行大久保石見守の為政の心遣いが実を結んでいったものと見るのが至当だと思う。一、二の例外はあっても、歴代の奉行や代官がこうした気構えのよい指導をして

いる。この誇り——全区一体観が、ひいて自分の仕事に打ちこんでいくという強い職場意識となって、すべての銀山人が心をこめて、掘り、練り固めた結果が「石州銀」となったもので、仰山にいうと山に働く人は勿論、銀山町の人々の心も一緒に固まったものといってよい。だから、石州銀は江戸時代になると、はっきりと他のいずれよりも高く評価せられ、銀座で貨幣に鑄かえられる時に、佐渡から送られた上質の銀でも100貫に対し銅20貫しか混じられないのに、「石見御銀は百貫目に付、銅22貫目入、丁銀に吹立 119貫目……」（「官中秘策」）という扱いをうけている。これは、はっきりと佐渡銀よりも石見銀が上質であることを認めてのことである。これこそ、「銀山一体」の具体的な現われであろう。だから、精練技術にも人知れぬ苦心——石見独特の苦心があったこともひといいっておかねばならぬ。そうし

た一体観的な気持は銀山の稼ぎ人の処遇などにもよく現われている。

銀山では、山で働く人に対する心遣いがこまやかで、

その家族にまで暖かい手をのばしている。成績によっての褒賞などもなかなか時宜にかなって行われた。銀吹が大層精出したおかげで銀がよくまとまった、などというような時には、当局は「銀吹共吹方出精いたし候」とて、「1.酒4斗5升、銀吹3人、但し1人ニ付1斗5升ツツ」与えたり、或は手当を増給したりなどほどよい扱いを忘れない。

また、全体的な、なごみの動きにも気をつけていて、年頭などには、元日は山は休業して年礼のため総出することは勿論であるが、2日は銀山山開きで、この日から6日まで休山、10日もまた山方休み、11日は「山方休み、山神社で山入式祭……」16日は「山方休み、大般若転読、山方総出礼拝」といった工合で、「こき使う」という感じは起らない。そして初午とか端午とか七夕とかいったような行事には、必ず休山して町方にも出歩いて適当な身体と心の休養をと

子ども読書座談会

出席者			
A	小5	男	G 小5 女
B	中二	〃	H 〃 6 〃
C	小6	〃	I 〃 5 〃
D	中一	〃	J 〃 5 〃
E	小4	〃	K 〃 5 〃
F	小4	〃	L 〃 5 〃

「現代の子どもは本を読まない」とよくこんな話を聞く、テレビ・マンガの影響なのか、勉強が忙しいからなのか。そこで「どれだけ子どもが本に親しんでいるか」「図書館というものをどう思っているか」をテーマに語ってもらった。座談会の内容を紹介すると本を読まないというその弊害は、テレビやマンガにもあるようだが、その多くは親達の無理解にもある。学習塾や他の習いごとへはいっしょうけんめいの親でも、読書となるとどれだけ熱意ですすめているだろうか。親達も読書をし、家庭に本がある環境の子どもは自然と読書の習慣がつく場合が多いようだ。一般的に良書といわれるもの（例えば全集もの）は、参加者のうち半数以上が持っている。これも自分で希望するのではなく、親達の配慮による場合が多いようだ。これには子ども達の非難が多いようだが、これは読ませた方に問題があるのではないだろうか。やはり読書はしやすい環境と、計画的に読書時間を生みだすように、家庭でのしつけが大切で、この機会にもう一度考えてみる必要があるように思われた。

今日は皆さんがどれだけ本に親しんでいるか、図書館というものをどう思っているかについて話し合ってもらいたいと思います。

——皆さんが本が好きになって読み始めたのはいつ頃からか、また動機（きっかけ）は何であったか思い出して下さい。——

B君 小さい時は父母や、おばあさんに読んでもらったり絵本を見たりした記憶があるが、自分で読み始めたのは幼稚園頃から少しずつ読むようになった。

Gさん 一年生の初め頃、何となく読んだら面白かった。

D君 幼稚園に行く前後、兄さん、姉さんが読んでいるのを見て……。

A君 学校の担任の先生からすすめられた。

F君 いつもは父に読んでもらっていたが、たまには自分で読んでみろと言われて読んだらおもしろかった。

Iさん 幼稚園の時、父が買ってくれた本を読んで。

C君 母が本を買ってくれて読んでもらっていたら自然と読むようになった。

——一日に何時間位読んでいるか——

E君 1時間から2時間。

Kさん 勉強のこともあるし、初めの頃だけ読んであとは暇をみて読む。

A君 内容にもよるが、おもしろいときは何時間

かかっても全部読んでしまう。

Lさん 寝る前30分から1時間位。

Kさん 30分かな、全然読まない日もある。

B君 勉強しろといわれた時、勉強する気になるまで読む。大体30分から1時間。

——本はどこで求めているか——

Tさん 書店で買うほうが多い。

C君 図書館で借りる。

Hさん 図書館で借りたり友達から時には借りる。

A君 やはり図書館で借りる方が多い。

——全集ものなど続けて計画的に読んでいるか——

Lさん 全集は読むが特に計画的には読んでいない。

A君 親は読めというがあまり読まない。

F君 暇がある時の都合で読む。

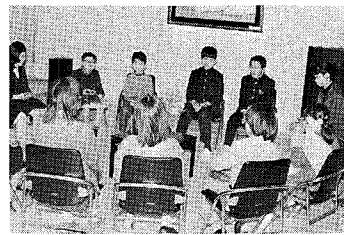
——一体どんな本をよく読んでいるか——

B君 推理小説

C君 SFもの

E君 工作関係

Gさん 小



説の類

Kさん 伝記もの

——家庭において親たちに勉強せよといわれたり、テレビの影響で本を読まなくなったといわれるが皆さんの家庭ではどうか。——

B君 テレビを見ていると親は勉強せよとはいわないが、本を読めとはいわない。

Hさん テレビを少し見て、本を読む時間を多くする。

A君 自分のところもテレビを見る暇があったら勉強しろという。

E君 テレビをやめて本を読む。

Tさん おもしろいテレビは見ているが本も読む。
——読書について、家庭で話し合うことはないか。
また、親に対して何か希望はないか——

Iさん テレビは見ているが、本は読まない。新聞ぐらいだ。親達も本を読んでもらいたい。

D君 家族ぐるみで、話し合うような時間があつた方がよい。

E君 夕食の時、いろいろな話がでる。その時に本の話もする。

F君 父も母も本が好きでよく読んでるので、本の話をしてよく聞いてくれる。

Tさん 親たちにも子どもの本を読んでもらい、本の内容を理解してもらいたい。

C君 母はよく読んでいるが、あまりやかましくいわないで欲しい。

——読んだあと、感想文を書くとか、ノートにしておけばあとで参考になると思うが——

A君 メモ程度に印象に残ったもの、感銘を受けたものは書いている。

Gさん 読むだけで特に書いていない。書かなければいけない場合は書く。

Kさん 書いていない。

B君 課題図書については、自分の為になるのですすんで書く。しかし強制されると、本も読みたくなる。

——最後に学校にも図書室はあるが、皆さんは図書館というものをどう思っているか——

Lさん 学校には古い本と辞書類しかないが、図書館には新しい本がたくさんある。

D君 学校の貸出しは2冊までで、その他に欲しいので図書館に行く。

B君 図書館は本の種類が多いし、たくさんあるので見たい本が手に入りやすい。

図書館ニュース

クリスマス子ども大会開く!

こどもと図書館の結びつきを深め、併せて読書普及の一助とするため、去る12月24日当館集会室で開催しました。

当日は松江市近郊から100名をこえる参加者があり、場内は立すいの余地がない超満員の中で幕あけとなり、紙芝居を皮切りに、ゲームや、手品、ストリーパーリング等が次々と繰り広げられました。



続いて講師の光田先生の音で一同大合唱「しあわせなら腹かかえワッハッハ……」と会場内

はこどもらの元気な声々々でうずまりました。

そして最後のだし物は、図書館職員が休みを返納して作りあげたかげ絵「ゆき渡り」でした。これは初めての公演でしたが、こどもたちは大喜びで終始熱心に観賞し、みな満足そうな様子でひきあげました。

第1回県立図書館派遣 研修会を開く!

島根県公共図書館協議会と県立図書館の共催で、県下の各市町立図書館職員と各町村のモデル文庫担当職員を対象にして、去る1月23日から3日間県立図書館で開催しました。特に今回は館内奉仕活動と図書館資料の選択、取書から受入、整理、配架にいたるまでを理論と実習の両面から研修し、今後の図書館業務に充分役立てて貰うためにはじめて催しましたが、参加者からは大変に喜ばれ、今後も引き続き開催する計画であります。

自動車文庫巡回予定(第5回)

2月19日～23日	美鹿コース
3月1日	八束コース
3月2日	平田大社コース
3月5日	島根半島コース
3月6日	伯太コース
3月7日	多伎コース
3月12日～14日	那賀コース
3月22日～24日	広瀬横田コース
3月26日～28日	邑智コース

注 積雪の場合は変更いたします。

著書と私

その1

伊 藤 菊之輔

私の著書は、郷土関係のものに一貫しています。脚下を見るに急で、全図的視野に立つ余裕はありませんでした。カタツムリの如く、家を負うて転々した貧しい記録にすぎません。

(1) 郷土誌 赴任した先々で、必ず自己流の郷土誌を刊行しました。近頃流行の市町村誌の原流になって生きているのは愉快です。

(2) 人物誌

島根県文化人名鑑

島根県人物事典

いずれも生きていて、引きあいに出されたり、引用されたりして、嬉しいやら、恥かしいやらです。問題を指摘されて、首をちぢめたりしています。

(3) 年表類

島根県文化史年表

島根県史年表(国史対照)

県史年表は、3ヶ月で絶版になりましたので、さらに増補改訂、ポケット版にして携行に便にしました。3版が必要な状勢です。

(4) 島根県関係図書解説

県下の図書館や、学校にある県関係の図書を網羅して解説しました。なかなかの大事業で心魂をすりへらしました。

(5) 陶芸関係

出雲意東焼 当時の先覚桑原羊次郎翁が序文を書き

激励してくれました。2版発行

島根の陶窯 今井書店のベストセラーが3ヶ月で絶版

山陰の陶窯 友人小山富士夫氏が序文を書き全国的に売れて忽ち絶版

(6) 石造美術関係

出雲の石造美術 正統2冊 本格的な解説書

石見の石造美術 石工史が出色のもの

隠岐の石造美術 廃仏毀釈百年目の快著で、北陸系と思われる小五輪塔の大群、庚申塔、流人墓等内地に見られない特異なものが多く今後の調査に待つことがさらに多い。

島根県の石造美術の研究は、私が始めてかすかながら道をつけました。これからこの道を行く人に期待すること大であります。

私は年をとりすぎました。肉体の衰えがひしひしと身に迫るのが感ぜられます。今月中に「出雲神話」を出版しますが、今後「山陰石造美術」と「島根の石造美術」を書きたいと願っています。

著書と私

その2

安 部 鶴 造

「不昧公と茶の湯」で、いいかったことは、松平不昧公の茶境一茶観には、生涯のうち、大まかにいって3段階あったということである。それをある程度追うてみたつもりではあるが、一つ残された問題がある。それは20才の知足説(「贅言」頃)から、40才頃の「枯淡」「(覚え書)頃」へと開眼したその心の跡を、公の文献によって跡付けてみたいし、又その責務(?)があると思っているのだけれど、未だ文献に恵まれず、徒らに過している次第である。明和8年正月に、公は師の伊佐幸琢から、石州侏の奥伝「秘事弁書」の譲りを受けた。処で、この伝授の前触れの手紙一有沢能登宛明和7年11月16日のあとは、「覚え書」まで16、7年の間、文献は空白といつてよいので、公が、この秘伝をみてどう心を開かれたかを知る術がない。石州の真意は、茶に「道理」はなく皆「虚」であると説いている筈。公とはいえば「贅言」で大いに道理一知足説を力説して御座る。そこえ裏腹な石州の説に会って、若い不昧がいかを感じたか。その後の修業の跡が知りたい。一これが私の待望である。父のようにしていた能登に対し、黙っていたことはとても考えられぬのだが……。

図書館資料紹介

1. 図書

源氏物語

円地文子著 新潮社

日本古典文学の最も傑作の一つである源氏物語。しかし、原文で読むには、あまりにも難しすぎる。本書は、与謝野、谷崎に続く現代語訳である。

「自分の心で読みとった『源氏物語』を現代の読者に出来るだけ気難しくない言葉で語りかけたい。又、本文への渡りよい掛け橋にしよう」と訳者がいっているように現代を時点として非常に読みやすく訳されている。

しかも、桐壺の更衣、光源氏等の登場人物の内部に立ち入って原文では臆ろに霧かすんでいる部分に照明を与え加筆し、一層主人公やこれをめぐる女君の悩みを鮮明に描いている。1千年を経てきた今日なお真実をひたすら求めて生きる人々の悩みが私達の胸に迫ってくる。

世界にも誇りうる源氏物語。

ぜひとも一度は読んでおく必要がある。

門

夏目漱石 岩波文庫

主人公宗助とその妻御米は、暗い過去を背負う夫婦である。俗世間に染まらず、ひっそりと暮らす2人には、暗さはさほど感じられない。が、ある日、何十年ぶりに過去の苦しみを思い出した宗助は、その苦しみにから逃れようと、友人の紹介で京の禪寺へ参禅に出かけ、その門をくぐった。一週間修行に励むが、悟りはおろか、苦しみは一向に消えない。結局苦しむほどの心配は、宗助の取り越し苦労に終わった。禅の悟りとは何か、宗教上では、悟り切れなかった宗助ではあるが、人間は、各々の苦しみと一生涯背負って生き続けねばならないと悟る。この門を再び出る時、宗助とともに、人生の悟りとはいかなるものか、一語に考えてほしい。

火垂の墓

野坂昭如 文芸春秋新社

うち続く戦いのかけ声の中で、ある日訪れた終戦、家は焼け、母と妹も飢の中で死ぬ。激しい勢いで、転回しようとする時代の中で、焼け跡にほり出された少年。敗戦後まもない、混乱と焦躁の日本国内で、生き抜くすべを知った大人たちにまじって一人になった少年が、必死に生きようとした姿は哀れである。しかし、悲惨で凄惨な構成と表現であるにもかかわらず、ほのぼのとした安らぎを感じさせるのは、ユニークな文体ゆえであろう。そして、又この激動の中で、根強く生きた日本人への熱い著者の共感が、生きずいているゆえでもあろう。この書は、著者自身の、魂の引き裂かれるような少年時代の体験が、見事に形象化されたものである。わずか数十ページの短編の中で、同時代を生きた人々、それを知らぬ人々へ、飢で死んでいった少年は、今、何かを訴えているようである。著者はこれにより直木賞を受賞した。(文芸春秋新社刊、同時収録「アメリカひじき」)

第二の性 ポーヴォワール著作品集

シモーヌ・ド・ポーヴォワール著 生島遼訳 人文院

訳者の「解説」によれば、「第2の性」は歴史的、哲学的、社会的、性的、あらゆる角度から女の生き方を綿密に検討した新しい女性論である、という。

最初、あまりにも「女」を前面に出しすぎると、抵抗を感じるが、確かに、これほど、しつこく、情熱的に「女」について考察した論文は珍しく、又、それが実存主義哲学に裏づけられた著者の人生観で支えられ「女」から「人間」の問題に論及している。

著者自身のことをいえば、「結婚」に縛られることなく、永遠の伴侶(サルトル)をもちつつ、生きてきたポーヴォワールの生き方は「自由な女(人間)として一つの理想ではないだろうか。

とつきが悪いが(描写が大胆)一読の価値ある書である。

2 視聴覚

◇映画フィルム

十代の性と愛

16ミリ 白黒32分



中学生たちが、映画館の前で、どぎついセックスシーンのスチールをてれながら見ている。

みんなと別れた

石田慎一郎は、洋品店でパンツを買うと、そっとタンスの奥に押し込んだ。この頃どことなく落着かない。姉の陽子は高校三年生だが、ある日、親友の京子が妊娠したのを苦に自殺したことを聞かされた。帰宅した陽子は、興奮のあまり涙を流している。母は『妊娠することは、女にとってすばらしいことじゃない。ただ問題は愛がほんものだったかどうかじゃないかしら…』とやさしくおしえる。慎一郎が仲

間たちとヌード写真を見ていると、『石田のねえさんのヌード、パチリッてやるんだよ』と仲間が云い出した。慎一郎は『なに』と怒り出してけんかになってしまった。傷だらけになって家に帰った慎一郎は、けんかの原因をどうしてもしゃべれない。心配した母は相手の家におわびに行った。そしてその家で男の子の生理について色々聞かされ、家に帰って慎一郎のたんすを調べてみると、新しいパンツが一枚はいっている。やっぱりと反省しながら、父親と話し合うのだった。そんなとき慎一郎が、いかがわしい本を万引し補導された。学校へ慎一郎をひきとりに行った父親は、その帰り道、今まで果敢にいた男と男の話しをはじめて交わすのだった。以上がこの映画のあらまします。

子どもの教育でもっともむずかしく、これからの大きな課題が性教育です。日本ではこれまで家庭での『性の対話』はほとんどタブーとされて来たために、おとなたちは慣れていません。まず親が性に対して確とした考えを身につけて、迷わず明かしく話すことができなければなりません。性はけっしてきたないものではない。本来美しいものであり、正しい性への視点を待つことが、人間尊重に直接つながるものであることを、知っていただきたい。

◇録音教材 家庭教育シリーズ (15分)

題名 内 容

新しい家庭の創造	家庭教育については、変動期にあり現在は家庭の生活が子どもを教育する傾向にある。自分の家庭、現実の生活を自分の目で認識して自力で向上する努力、人間として成長する努力をしていく中で新しい家庭を創ることが望まれる。
家庭生活とすまいのくふう	家庭教育は、すまいの中で行なわれるため、すまいの工夫は家庭教育の大きな前提となる。家庭の生活は共同生活と個人生活があり、そのための場所が別個に必要である。それは、〈食〉食事をする。家庭での共同生活。〈寝〉寝ること。個人的仕事。家庭教育には、この食寝分離の条件が調和よく営まれる事が大切である。
家事労働への子どもの参加	子どもの手伝い参加についての意義は勤労教育にある。働くことの意義、家庭の中の生活技術の伝承、家族の役割によるそれぞれの立場などを理解させる。
親の結婚生活と子ども	子どもは親の結婚生活をどんなふうに見ているか。小さな幸せ、理想的な夫婦ととらえている子が多い。母親は感情的な面から、父親は理性的な面から補いあっている姿が理想的な夫婦の姿と子どもには映っている。
家族構成と子どもの教育	家庭とは社会の縮図であるため、白紙のような子どもを家庭という社会で段々将来、大きな社会に適應できるようにしていく事・又家庭を構成している人たちが良い家族の一員たろうとする事が正しい方向づけになる。
子どもの余暇	子どもは遊びでエネルギーを興味のある物にむかって集中的に発揮する。興味は自発的積極的な活動を呼びおこし創造性と工夫をこらし、自分全体を完全燃焼の状態にするものであるが、子ども自身が、学習・テレビ・クラブ・運動・etcを自分で設計した時間帯の中でいかにこなしていくかが問題である。